

ドストエフスキイ研究ノート (二)

—『ヴェレーミヤ』をめぐつて—

新 谷 敬 三 郎

一

一八五九年十二月のある日、ドストエフスキイは初めてみるペテルブルグのニコラエフスキイ停車場のプラットフォームに降りたつた。それは彼がシベリヤへゆく前に建物がやつと建ちかかつていて、余命いくばくもなかつたベリンスキイを、『とうとうわが國にもどうやら鐵道が一本できるか』、とよろこばせたものだつた。

ドストエフスキイの兄、十年まえには詩人であり、『ドン・カルロス』やロマン主義の優秀な翻譯家であつたミハイルは、今ではタバコの製造販賣をやつていた。詩人の榮光なんて當てにもならないものを、首都の商賣人という確實な名聲にふりかえて、彼の商賣は結構悪くはなかつた。小資本の苦しさを巧みな商略できりぬけて、ロシヤ初つて以來の新機軸、おまけ附タバコを發賣して評判だつた。『世の中にドストエフスキイのタバコほど品のよいのもありはせぬ』なんて戯歌が残つてゐるほどだ。もともとドストエフスキイの家には、主として母方の家系には生粹の商賣人の血が流れてゐた。金に對する慾望、富についての空想は、ドストエフスキイ自身若い頃から身に覺えのあ

る情熱だつた。彼が一生のあいだにかいた老大な量の手紙の大半は金銭上の事柄なのだが、金に缺乏している泣き言や無心、催促か、さもなければ、出版企業の計畫とか原稿賣込みの術策などということが、テンカン氣質特有のくどくどした詳細に涉つた記述に充ちている、といつても過言ではない。それらを讀むと、いかにも生活に追いまくられている貧しい男の一ぱし目先のきく才覺を揮うのに躍起となつてゐるさまが浮んでくるのだが、彼の貧乏というのも底ぬけの浪費癖からきているのだし、おまけにこの商人の血をうけている作家は、やがて賭博の味が忘れられなくなり、やりだすとトコトンまで賭けずにはおれない投機的な空想家だつた。そのために彼の友人や兄ミハイルなどという人たちは、どれほど苦しめられたことだろう。この男が兄貴を相手に時代に即應した企業を始めることになる。雑誌の經營である。むろん兄のミハイルも昔の夢は忘れかねてゐたろうし、時代の移りかわりとともにジャーナリズムが時流につて擡頭してくると、どうせ大資本との競争にはかてぬヤクザなタバコ工場の經營なんかよりは、新しい雑誌を賣出す方が有利だと思つたかもしれない。(やがて雑誌をだして一年もした頃、ミハイルは工場を處分したが、負債を支拂うと一錢も残らなかつたといわれる。)

雑誌發刊の話は、まだドストエフスキイがシベリヤの邊境セミパラチンスクで兵役に服していた一八五八年頃からあつたもので、兄ミハイルはその年の六月にペテルブルグ檢閲委員会に雑誌發行許可の申請をだし、九月末日づけでその許可をとつている。當時の計畫によれば、『ヴレーミヤ(時代)』という名前の政治・文学の週刊誌だつた。

ドストエフスキイが四年間の懲役をおえて監獄をでてくると、やがてロシアの政治・社会狀況は大きく變化しはじめた。ニコライ一世の死(一八五五)とセバストーポリの陥落がきっかけだつた。デカブリストたちの處刑をもつて治世を始めた(一八二五)ニコライは、やがて崩壞の運命におかれてゐる農奴制社会のうえに、猜疑と危惧の統治方式を布いた。ドストエフスキイはこの政治の最大の犠牲者の一人だつた。クリミヤの敗戦、屈辱的パリ條約は民衆の感

情を刺戟した。ニコライのあとを襲つたアレクサンドル二世も要するに父親とそれほどちがう統治者ではなかつたのだが、性格は正反對の柔和・寛容、そして大詩人ジュコーフスキイの薰陶をうけたということが身上だつた。アジア的風土のうちに築かれた頭でつかちの地主・貴族の官僚國家では、寛容の美德なんていうものがどんなものであるか、やがてわかるだろう。アレクサンドル二世は歓迎された。ロンドンに亡命していたゲルツェンさえしほしの幻想をたのしむことができた。そこにはもうひとつの事情があつた。一八四八年の革命の失敗は深刻な幻滅を味わせた。ヨーロッパの文明も革命もはや信するに足りないと感じられたとき、ロシアがひとつの可能性を暗示したのだ。これはなにも、ひとりゲルツェンの問題だけではなく、當時のロシアのインテリゲンチヤがひとつ抱きえた幻想だつた。ドストエフスキイも例外ではなかつた。彼の場合は、この幻想が遠くシベリヤの思い出と結びついてしつかり胸裡に根をはつてしまつたので、やがて苦杯をなめさせられたのちにおいても、それは自然に彼のなかで成育していつたのだといえるだろう。

この解放との密月は一八六一年の初めまでつづいた。解放皇帝と謳われたアレクサンドルの目標は第一に『農奴制が下から廢棄されるのを待つよりも、改革を上からした方がよい。』（一八五七年彼はこのように地主たちを説得した）といふことにあつた。その結果が一八六一年二月十九日のマニフェストとなつてあらわれたのだが、その公表は故意に三月五日にのばされた。それは焦躁と昂奮をもつて待ちのぞんでいる民衆に、運命の大變革を知らせるのに謝肉祭の馬鹿騒ぎの最中でなく、贖罪節の日曜日を選ぶという啓蒙的絶對主義の猜疑と危惧がうんだ慎重さからだつた。こういつた慎重さは申し分なく、當の解放令のなかにも織込まれてあつたから、解放皇帝の政府はたちまちその猜疑と危惧の牙をむかねばならない事態に直面したのだ。幻滅は急速に深刻にロシアの社会をおおう。

ドストエフスキイ兄弟の新雑誌『ヴレーミヤ』はちようどころした瞬間に發足した。

一八六〇年六月、兄ミハイルは雑誌『ヴレーミヤ』を週刊誌から月刊誌に変更したい旨の申請をパテルブルグ検閲委員会にだして、その許可をうると、九月、主要な新聞に創刊計畫の廣告文を掲載した。政治囚の經歷をもつドストエフスキイは表むきジャーナリスチックな活動をするにはまだ禁じられていた。文学作品の發表はすでにシベリヤにいるときから、禁を解かれていたけれども、彼が正式にジャーナリズムに復歸できる権利を回復するには、一八七三年まで待たねばならない。彼は今後ともしばらく警察の内密の監視のもとにおかれているだろう。従つて『ヴレーミヤ』發行の責任者はミハイルがなり、經濟的運營の面も専ら彼が當つていた。弟ドストエフスキイはいわば精神的指導の中心で、その周りに、かつてのペトラシエフスキイ会での友人ミリュエーコフがこの頃主催していた文学サークルで知りあつたストラーホフや、この人物の紹介でやがて雑誌に参加するようになるアポロン・グリゴリエフらがい

た。

創刊廣告の文章をはじめ、さまざまな評論・雜文が今日までに相當數ドストエフスキイの筆になるものであると推定されているが、十年ぶりにこの微妙な一時期のペテルブルグの文壇に復歸して、流刑歸りの作家の精神は昂揚し緊張し、潑刺とした反應を示す。これからの數年間、彼は『ヴレーミヤ』創刊號から連載をはじめた長篇『虐げられし人々』、ある週刊紙（ステルロフスキイの『ロシヤ世界』）にのせはじめて、のちに『ヴレーミヤ』にのせ直した『死の家の記録』を除いては、ほとんど文学作品というものをかかないで、もつぱらジャーナリスチックな仕事に没頭するのだが、やがてラスコリエコフの誕生となつてあらわれるであろう決定的ななにごとかが彼の胸裡深く進行しつつあつた、いわば苦澁にみちた『地下室』の生活が行われていたのだ。それはついにひとつの問のうちに、自己を

發見するに至るこの四十男の野心と懷疑に昂奮し緊張した一時期だつた。

この一時期は十九世紀ロシアの歴史にとつても、また決定的ななにごとかが行われた時代だつた。『われわれはまことに注目すべき危機的な時代に生きている。』とドストエフスキイは前記の廣告の本文の冒頭にかいている。それはまだ來るべき二月十九日の解放令を待ちのぞんでいた、バラ色の危機だつたので、一八五五年以來にわかにはひらけてきた地平線は當時のインテリゲンチヤ、わけてもシベリヤから解放されたドストエフスキイにはおそらくあまりにも多くのことを夢みさせた。言論に對する檢閲は年年寛大になり、ニコライ治世下の沈黙のあいだに形成され強化されていつた觀念や思想は自由な表現の場をみつめて、ジャーナリズムの繁榮となり、またもつと實際的な活動の分野を希求するようになっていた。むろんそこには現實に則した具體的な目標があるわけではなかつた。永いこと(三十年代から四十年代にかけて)當代ヨーロッパの哲学や社会思想のきわめて抽象的な理解を余儀なくされて、可能性のない談論風發のうちで育つてきたロシアの社会にとつては、農奴解放(それも海のものとも、山のものともわからぬ)が實際に何を意味し、いかに對處すべきか、そこまで理解のゆきとどかなかつたのは當然だ。教育、言論の自由、拘束の排除などということがまつたく抽象的な指導原理のもとに言論・活動の花を咲かせた。

ロシアの文学、わけてもベリンスキイが道を拓いた近代文学は、大かれ少かれこうした社会の動きに密着したものだ、この時期においてはとりわけ文学とは、社会のひとつの全體をなすなものかの直接的な反映でなければならなかつた。それは文字通り、なにものか、であつて、近代のヨーロッパ文学が明瞭に認識し解析し、少くともそうしようとなつたものを、ロシアの文学は知らなかつた。この點にトルストイの『戦争と平和』や『アンナ・カレニナ』や、ツルゲーネフの作品ですらもつている敘事詩的世界の壯大さがあるので、トルストイやドストエフスキイが現代の世界文学に決定的な影響を與ええた秘密があるように思われる。それは見方によれば、いわば『イリアド』や

『オデツセイ』が物語られた、くらい自然がまだ逞しく生きていて、その原野にゲラシム（ツルゲーネフ『ムム』）とか、プラトン・カラターエフ（『戦争と平和』）とか、ペトロフやルーチカ（『死の家の記録』）という想像もつかない人間がうごめいていた世界において、一方當代ヨーロッパの社会・思想のめまぐるしい變轉を送迎して、自分たちが直面している現實との隔絶にいわば近代の分裂の意識を骨身に徹して味あわされねばならなかつたロシアの作家たちにして初めて人間のうちにあるもつとも根源的なものと格闘しえたという事實によるといえるだろう。

實際ドストエフスキにとつて、少くともある瞬間には、自分が生をうけているロシアとは、あのオムスクの『死の家』であり、人生とはかつてのセミヨフスキの死刑場の一幕だつただろうしこんな男にとつて、『古代のカフタンやビロードの袖無胴着や金モールつきの絹のルバーシカを着て、民衆そのものに融合していると想像している』スラヴ主義は笑うべきアナクロニズムであり、『實際的な利益』をもたらさないような藝術は無條件に輕蔑する、といういわば性急な啓蒙主義にとりつかれていた當代の進歩主義もまた愚劣なナンセンスにすぎなかつたろう。

では、このドストエフスキが、『危機』の關頭に立つて、新しい雑誌の中心にすえる思想になにを考えていたか。思想・傾向の鮮明な對立、その深刻な鬭争によつて動かされてきたロシアのジャーナリズムにあつては、雑誌の立場は商賣上にも必須の條件だつた。その商標を『ヴレーミヤ』はおそらく申し分なく選んだといつてよからう。曰く、『ポーチヴァ』（土に歸れ、というときの土に當る）、そこから『ポーチヴェニキ』（土に歸れ主義者、とでもいふべきもの）という一派を名告つた。われわれは自分の土地から離れてしまつた、われわれは自分の土地を再び見出さねばならない。要するにこれが眼目だつた。むろん、この主張の背景には、四十年代以來の二つの思潮の流れ、その鬭争があつた。つまり、ピョートル大帝以前のロシアにかえれ、という國粹主義のスラヴ派と、大帝の改革を是認してヨーロッパの思想・制度によつてロシアを再生せしめようという西歐派だ。すでに述べたように、四八年

の革命以後のヨーロッパの反動と、五五年以來ロシアの幻想的な現實とのあいだにあつて、今やこの二潮流は微妙な事情のもとにあつた。その時『ヴレーミヤ』はこの二派の綜合乃至超克をめざすスローガンのもとに發足したのだつた。ドストエフスキイは創刊廣告のなかにかいた。

『われわれの將來の活動の性格は極度に全人類的なものでなければならず、ロシアの理念は恐らく非常なねぼり強さと非常な大膽さをもつて、ヨーロッパがその個々の國民性のうちに發展せしめたあらゆる理念の綜合となるであろうし、恐らくこれらの理念のあいだにあるあらゆる敵意がロシアの國民性のうちに妥協と今後の發展とを見出すであろうことを豫測する、敬虔の念をもつて豫測するものである。』

こうしたドストエフスキイの思想、というかロシアに對する理念はその後『惡靈』のシャートフの所謂『神をはらめるロシアの國民』という考えなどにも見られ、死のまえの年にしたプーシキン記念講演で、再び彼自身の口からであるのだが、このような觀點からするスラヴ派と西歐派を止揚するという試みは、この當時、解放の希望を抱いてロシアの社會がさまざまな對立をこえて協調してゆこうとする事情にあつては、その内容の曖昧・抽象的なにもかかわらず、相當の現實性はあつた。『神をはらめる』などという表現にも見られるような、その後のドストエフスキイのスラヴ主義的な傾向はまだこの頃にはなかつた。ピョートル大帝が西歐にむかつて窓をひらいたペテルブルグは西歐派の牙城だつたが、なんといつてもドストエフスキイは作家的な教養をそこで培つていたので、『ポーチヴエンニキ』の觀念にはすでにスラヴ主義的な萌芽が多分に見られ、後年の見解はその論理の當然の歸結だつたともいえるだろうが、『ヴレーミヤ』の基調は所謂自由主義を標榜することにあつた。

この頃ペテルブルグ人のうえに決定的に君臨し、若いインテリゲンチヤの思想を支配して、もつとも華々しい活動の頂點にあつた『ソヴレメンヌク（現代人）』（一八四七—一八六六。ネクラソフ、チエルヌイシエフスキイ、ドブ

ロリュポフ、シチエドリンらが筆をとつていた)は所謂革命的民主主義者の機關だつたが、それが『ヴレーミヤ』の創刊を友好的に紹介したし、ネクラソフは詩を寄稿して、オストロフスキイの戯曲と並んで掲載されたし(六一年十月號)、シチエドリンさえ作品をのせていた(六二年四月號)。ドストエフスキイが政治犯として懲役を経験してきた事實、『死の家の記録』や『虐げられし人々』の作者であるという事實も當時は多くのことを意味していた。さまざまな事業の基金募集のために文学の夕べといつた催しが流行していて、そこにはもつとも代表的な進歩的文学者たちが登場しているのだが、彼も大抵それには一枚加つていた。こうした事情のもとで、『ヴレーミヤ』の滑りだしはまず好調だつた。最初の年の發行部數は二三〇〇、次の六二年には四三〇〇の固定讀者があり、二五〇〇の豫約購讀者があれば完全に收支償つたので、この新しい企業は決して悪くはなかつた。

三

『ヴレーミヤ』の同人はアポロン・グリゴリエフ(一八二二——六四)を中心とするグループと、ドストエフスキイとストラホフ(一八二八——九六)のグループと、二つにわかれていた、と當のストラホフが、『回想』のなかでかいている。

グリゴリエフという批評家はポゴージンの『モスクワ人』誌の所謂『若き編集者』の一人で、四十年代の自然派やペテルブルグ文学に反抗して、オストロフスキイをロシヤの新しき言葉と賞揚しつつ論陣をはつて、世にでたのだが、『モスクワ人』にあきたらず、『ポーチヴエンニキ』に共鳴して『ヴレーミヤ』にやつてきたスラヴ派だつた。この人物が、それまでスラヴ主義に無智だつたドストエフスキイにその思想を吹きこんだ。グリゴリエフは一種狷介な自己陶醉家で、人の顔もみないで自己の所信を滔々と辯ずるといつたところがあつたから、ペテルブルグ人士には

無意味であるキレーフスキイやホミヤコフのスラヴ主義の教説を誌上で論じだされると、ドストエフスキイ兄弟、わけでも経営責任者ミハイルは當惑して、『キレーフスキイやホミヤコフはそんなにすごい人物なのかね。』と皮肉をいつてもみたくなくなる。少くともそうグリゴリエフは受取つたから、ぶいと『ヴレーミヤ』をとびだして、南ウラルのオレンブルグへいつてしまふ。そこから彼はストラホフに手紙をかいて、ミハイルは弟の立派な才能をまるで驛馬車のようにこきつかつて、賣行目當てに『虐げられし人々』をかかせているが……とむろん當人は眞面目にそう信じていたのかもしれないが、中傷している（六一年六月一八日）。後年グリゴリエフが死んだとき、ストラホフが追悼論文をかき、ドストエフスキイはそれに註して兄のために釋明したが、そのなかで、彼を『分裂することもつとも少く、反省することもつとも少かつたハムレット』だと斷じ、『グリゴリエフは世界中のどの編輯部にも全く安ずるところとは出来なかつたとわたしは考える。そしてもし彼が自分の雑誌を持つていたら、創刊後五ヶ月もたたぬうちに彼自らそれを沈没させてしまふだろう。』とかいている。

このグリゴリエフのおかげで、ドストエフスキイはスラヴ主義に接觸し、接近するので、『いずれにしても『ヴレーミヤ』の方向がアポロン・グリゴリエフを通して、ポゴジン流のスラヴ主義の一支流に合していることは明らかだ。』とストラホフは斷じているくらいだが、ドストエフスキイはペテルブルグの讀者の趣味をよく辨えていたから、表現には絶えず氣をくばつていた。それでストラホフなども『時として編輯部はわたしの論文中わたしが攻撃した著者の名前になにかしらお追従の形容詞、例えば才能ある、天賦豊かな、とかあるいは括弧で（しかしながら尊敬に値する）とか附したり挿入したりした。』とこぼしている。要するに『ヴレーミヤ』は西歐派が壓倒的に支配しているペテルブルグの鼻息をうかがつて、『ボーチヴエンニキ』という折衷的で曖昧な身振りで、自からは公正な自由主義者をもつて任じていることが、營業政策上必要だと考えていたのかもしれないし、またこの危険な昂奮のうすま

いている時期に、悔悛した政治犯が、かつて彼が演じたよりも十倍もきびしい舞臺をまえにして（しかも観衆は自分を殉教者として迎えているのだ）自分の演技にとまどわざるをえなかつただろうし、なによりも己れに誠實であろうと、いつの時代にも悪びれず生きて、その負擔に耐えることをもつて文学してきたこの作家の心情そのものがある豫感のまえに漠然とした意識の混濁にのみこまれていたのかもしれない。

ロシアの事情、わけても解放令以後の社会状態と、つねに激しい論争を喰つて生きていたジャーナリズムは、決して曖昧な懷疑を許さなかつた。まず公正穩健などという徳目を吹きとばし、實利的な闘いだけが絶對だという信念が横行する。こうした風土のもつとも激烈な地帯であるペテルブルグ文壇に生きて、ドストエフスキイは生涯もつともジャーナリスチックな方法で小説を次々と産みだしていた。彼自身紛れもなくジャーナリストであり、そうあるよりほかはなかつたでもあろうし、そうある必要をも感じていたにちがいない。『ヴレーミヤ』が潰される（六三年）と、すぐ『エポハ（世紀）』（六四—六五）を出し、のちに『作家の日記』（一八七三、七六—七七年）の獨自なジャンルをひらいて、くりかえしジャーナリズムに歸つていく。そればかりではない、彼の小説自體が一種ジャーナリスチックなものであつて、『白痴』や『未成年』のなかで辯解がましく嘆いているように、いわば流動せる現代に生きる典型を造形することの困難を痛感しているが、ロシアにおいてすら現代の流動せる現實にこれほど生きいきとした興味と、これほど深いところで反應を示した小説家も少かつただろう。

この作家がはじめて雑誌をだしてから迎えねばならなかつたペテルブルグの事情は喧噪と昂奮、それも一種革命的な匂いのするものだつた。それはまず大学生の騷擾となつてあらわれる。アレクサンドル二世の改革は大学にも大幅の自由を與えた。當時のインテリゲンチヤは主としてジャーナリズムと大学關係の人々からなつていたのだが、その多くは所謂雜階級の出身で、学生の多くはちようどラスコニコフのように家庭教師や筆耕などのアルバイトをし

て、なおみじめな暮しをしなければならなかつた。彼らは急進的革命的な分子として、金庫や文庫の設立などという對社会的活動に昂奮して、むろん学業なんかそつちのけだつたのかもしれないが、政府はこうした動きに危惧を感じて、それを抑制する條令を作つて夏のうちに發令した。秋の新学期に学生たちが大学へあらわれると、なにか学生心得みたいなもの（當時マトリークルといわれていた）を渡された。そこで彼らの抵抗が始まる。當時の文部大臣やペテルブルグの督学官などはみないかにも武人らしい將軍がなつていたのだが、その督学官のところへデモを行う、といった風な事件をひきおこして、官憲は大舉彼らを街頭で追いかける、捉まえる。要するにわが國でもおなじみの光景が展開したのだろうか、監獄に收容されるもの、シベリヤへ流刑されるものなど相當の犠牲者をだした。市民は學生の側に同情的であつて、ペトロパウロフスクへ慰問におしかける。「ヴレーミヤ」も大きなロースト・ビーフにコニヤク、赤葡萄酒の瓶をそえてこの時代の英雄たちをねぎらつた。ついに大学は閉鎖される。教授たちは公開講座を別の場所で開く許可を請願して許されると、それは学生たちの自主的な運営に委せられ、仕事はうまく運んでいたが、明けて一八六二年の三月二日、『文学と音樂の夕べ』がひと騒動もちあげた。それは困窮文士・学者救済協会の義捐の催しで、出演者はドストエフスキイ、チエルヌイシエフスキイ、ネクラソフ、クイロチキンなどという顔ぶれで、音樂の演奏もこれら作家たちの妻や娘といつた人々で、ドスルトエフスキイの姪もその一人だつた。ところで當時有名な歴史学者だつたパヴロフ某という教授がむろん事前に検閲を受けた論文で講演したのだが、彼の身振や聲音を検閲するわけにはいかなかつたので、讀まれた論文は俄然美事な効果をうんだ。萬雷の拍手、歡喜の叫び、会場は完全に混亂した。のちにドストエフスキイはこの情景を『惡靈』に利用して、パヴロフの講演そつくりのパロディを試みているといわれる。（『惡靈』第三篇第一章祭——第一部）三日のちに教授は憲兵に拘引され追放になつた。この学外の自由なる大学は閉鎖された。

こうした事件とともに、一八六一年の秋ごろから姿をあらわしはじめた『若き世代へ』などの檄文や、ようやく激しさを加えてくるジャーナリズムの闘いが、ロシア帝國の首都といつても當時人口六十萬にもみたぬほどの都会にすぎなかつたペテルブルグのひと握りの知識人の社会で、激情と不安の渦をまきおこしていたので、その社会が小さければ小さいほど、渦がまきおこす波紋の波及するところは大きであり、それだけ激しく彼らを焦立たしたことだろう。

四

そうした波紋は、主として當時ペテルブルグの世論を代表していた『ソヴレメンニク』がまきおこしていた。それは文学作品や評論をめぐつての論争なのだが、むしろ論争なんていうものではなく、當時いわれていたように、文学的處刑、という言葉がなにかびつたりするような現象だつた。

その頃『ソヴレメンニク』の衛星雑誌として、同誌の附録『スヴィストク(笛)』(ドブロリユボフ編集)とか、諷刺漫畫雑誌『イスクラ(火花)』(一八五九—七三、漫畫家ステパノフ、詩人クロチキン編集、大變な人氣で七千部でていたという)があつたが、これは反動だと眼をつけた作家には、これらの雑誌が一齊に攻撃の矛先をむけて、つるしあげるといふわけだ。現代の良心であると自他ともに許している進歩主義者からひとたび攻撃をうけると、今まで親しくしていた善良なる人々も彼を氣の毒そうに眺めだして、辯護してくれるどころかあえて同情の意をも示さない、といった風な素振をするので、これは相當の威力を發揮した。こうした『論争』のもつとも典型的な場合が、ツルゲーネフの『父と子』で、それは一種象徴的な意味を持つていたといえるだろう。

その頃『ソヴレメンニク』誌で専らこうしたいわば文学的告發をやつていたのはマクシム・アントノヴィチ(一八三五—一九一八)というチエルヌイシエフスキイやドブロリユボフの薰陶をうけた少壯の論客だつたが、彼は一八

六二年同誌の三月號に『父と子について』を發表して、これは悪意にみちた小説だと彈劾し、ひたすら讀者の眼前で侮辱せんがために人物を描寫しているといいがかりをつけた。ツルゲーネフは困惑し幻滅した。その生涯の大部分をヨーロッパで送つたこの聰明なる懷疑家はさすがにこころ、二年のロシアの状況を判斷しそこねて、自分がそのすべてをかけて造りあげたパザロフなる獨創的人物がペテルブルグでどんな扱いをうけるか、思いも及ばなかつたのだらう。だが、この作者こそ父の世代である四十年代の自由主義者としてすでに時代にとり殘されていたのであつて、當代の『ニヒリスト』たちの頭腦をみたしていたものは革命的啓蒙の情熱だつた。文藝批評というものも、この子の世代にとつては、革命的啓蒙の手段として意味があつたので、そのために實際的利益をひきださないような文学作品などは一文の價值もなかつた。チエルヌイシエフスキイやドブロリユポフらはベリンスキイが開拓した文藝批評の直系の繼承者だちにちがいはなかつたが、ベリンスキイが終生喪うことのなかつた批評の基礎をなす對象に對する虚心な眼光をくもらせていた。時代があやまらせたのだ、といえはそれまでだが、それならばおれたちはどうなのか、と人間像の造形に腐心する實作者たちは反問するだらう。

すでに『ヴレーミヤ』の第二號で、ドストエフスキイはこの問を提出している。『——ボフ氏と藝術の問題』というドブロリユポフ流の文学觀に對する反論である。それはいわば觀念と現實、美と生活の相剋というナイーヴな疑問に對する、文学に身も心も入れあげた實作者の正論なのだが、そこには、このペテルブルグの現實をまえにして、『美の要求』と現實の要求の一致・調和を藝術という行爲のうちに信じないことには、すべては徒勞になつてしまふだらうという危惧が聞かれる。

『あらゆる藝術の基礎である創造は、人間のオルガニズムの一部の發現として、人間のなかに生きている。人間と分ちがたく生きている。したがつて創造というものは、全人間の希求しているもの以外の希求を待ちえないのだ。』

……藝術のために危惧することは少しもない。藝術は己れの使命に背きなどしない。藝術はつねに人間とともに、人間の眞の生活を生きるだろう。それよりほかのことは、なにひとつなし得ないのだ。従つて藝術はつねに現實に忠實だということになる。』

誰がこんなわかつたようで、わからない抽象を信ずることができるか。いや、これをかいている筆者自身が、反論の熱にうかされていなかつたならば、かくことも氣羞かしかつたにちがいない。ドストエフスキイはこのとき、十年まえにもそうであつただろうより以上に、自分の道は小説をかく以外にはない、そのように生れついているし、現實にそれで飯をくうほかはないのだと信じていたにちがいない。

『ソヴレメンニク』のツルゲーネフに對する告發があつた翌四月、『ヴレーミヤ』はストラーホフの同じ作家を純客觀的な作家として賞揚した論文をのせた。ストラーホフはいわば『ニヒリスト』の現實性を指摘したのだ。周圍の狀況は險惡になる一方だし、いつまでも公正なる自由主義の旗標のもとで、世間の木鐸だという顔をしていることは許されなくなつていた。そこで『ヴレーミヤ』も時勢に即應した態度をとらなければならなくなる。むろん、そもそも『ソヴレメンニク』の所謂革命的民主主義とは立場を異にしている『ヴレーミヤ』の歸趨はおのずから明かだ。そこで告發の順番は續いて『ヴレーミヤ』のところに廻つてきた。例のアントノヴィチが『ソヴレメンニク』四月號に『ヴレーミヤ（時代）の精神について』をのせて、主としてストラーホフを槍玉にあげた。すでにこの革命的啓蒙家は『ポーチヴァ』という觀念の非科学性を批判して、その精神の曖昧さを指摘していた（六一年十二月）が、それがいよいよ反動の馬脚をあらわしたというわけだつた。こうした批難攻撃においても、それが『虐げられし人々』『死の家の記録』の作家ドストエフスキイ氏に決して及ぶものではない、と几帳面に斷つてあつたといわれるから、小説家としての彼の信用はまだおちてはいなかつたわけだ。ところで『ソヴレメンニク』の活動にはすでに未來がな

かつた。やがてふた月もたつと、状勢は更に悪化して、ついに六月に八ヶ月の發行停止をうける。それは五月の半ば頃から半月ばかりのあいだに頻々として起つたペテルブルグの怪火と不穩な文書が流布されたからだ。火災は五月二十八日アブラクシンとシチウキンという、木造家屋の雑多な商店が密集している地域に發して三日三晩燃えつづけて三十日にやつと火の手を収めた大火に至つて最高潮に達した。當時首都には一臺の蒸氣ポンプもなかつたといわれるから、當局も狼狽をきわめたにちがいないが、市民の恐怖も想像以上だつたろう。この火事はポーランドの革命家や『ニヒリスト』の仕業だという流言が飛んだ。ちようどこの頃ヨーロッパから歸つていたツルゲーネフは自分が發明した『ニヒリスト』という言葉をやというほどきかねばならなかつた。『あなたのニヒリストのやることをごらんさない。』会う人ごとにこういわれた。

こうした物情騒然たる五月のある日、ドストエフスキイは自分が借りている部屋の扉のハンドルに紙片がのつてゐるのを發見した。ザイチニエフスキイの『若きロシヤ』の檄文である。それは、平和的改革の可能性を否定し、たゞえいかに残酷流血のかたちをとろうとも、暴力革命を恐れず、社会變革のときは近きにあり、われらはやがてひとつの叫びを『斧のかたち』に鑄出すだろう、そのときわれらとともにいないものは反對者であり、反對者はすなわち敵であり、敵は徹底的にうち殺さなければならぬということを銘記せよ、とかいて、『ロシヤ社会民主主義共和國萬歳』と結んであつた。それはもう檄文というものではなくて、むしろ脅迫狀に似ていた。ドストエフスキイはのちにかいてゐる。

『そこでわたしはずつとまえから、この人々に對しても、彼らの運動の趣旨に對しても、心の眞底から不同意だつたので、そのときも突如として彼らのへまさ加減が不快に感じられ、ほとんど恥かしくさえなつた。』なぜあの連中がやると、こんなに馬鹿らしく、へまになるのだろうか。』……しかしこの出來事が唯一の例外的現象でもなければ、

わたしになんのかかわりもないような人々の馬鹿らしい小細工でもなさそうに思われる、そこが情けなかつたのだ。……わたしはペテルブルグにもう三年住つていて、さまざまな現象を凝視していたにも拘らず、その朝この檄文はわたしの度膽をぬいたかたちで、わたしには全く意想外な新しい啓示のように思われた。その時まだわたしはこれほど下らないものだろうとは、ついぞ豫想してなかつたのだ。つまりその下らなさ加減がわたしを慄然とさせたのだ。』

(一八七三年『作家の日記』)

その夕方、彼はチエルヌイシエフスキのところへでかける。そこで二人が交わした会話の細かい點について、二人のいうところはいささか相違している。大體この文章でドストエフスキは『若きロシア』を『若き世代へ』の檄文とかいているが、この方はすでに述べたように前年の秋にでたので、明かに記憶ちがいであり、またこの訪問を檄文に關係させているが、チエルヌイシエフスキによれば、それは當時の怪火に關してだつたという。いずれにしても、話の内容については事實と相違はないと考えていいだろう。ドストエフスキはこの高名なる革命的民主主義者にむかつて、こういう馬鹿なことは是非やめさせるべきだが、あなたは彼らに充分權威を持つているのだから、彼らを抑えることができるはずだ。むろんあなたは直接に彼らと面識ではないと信じているが、自分は不同意だとはつきり表明してくれればいいのだ、という意味のことをいう。すると相手は、『それは利き目がないかもしれませんがね。それにこうした現象は、傍系的な事實としてやむを得ないことです。』と答えた。ドストエフスキは誌している。二時間ばかりの對談だつた。それから四、五日たつて、あるいは一週間か十日ほどたつて、チエルヌイシエフスキが彼のところを訪問して、先日の自分の話を諒解してくれ、といつて、ドストエフスキも承知する。そしてストラホフや兄ミハイルの話などして、一時間ばかりたつて、あるいは早々に彼は引上げていつた。

それからチエルヌイシエフスキが逮捕されたのが七月七日だつた。そのときドストエフスキはゲルツエン詣で

をしてロンドンからパリへ歸りつつあつた。

五

ドストエフスキイがヨーロッパへたつていつたのは六月七日だつた。それは彼の日頃の念願であり、彼には初めての外國旅行だつた。さる五月二日、彼は内務省に、健康のために外國で温泉療養と海水浴をするという名目で許可をもらつている。

ここで彼が六月二十六日パリからストラーホフへ送つた手紙の要所要所をかきぬくことにする。當時の状況のさまざまな印象の片鱗がうかがえると思われるので。

『……おつしやる通り今は悪い時期——憂鬱な期待の時期です。でも雑誌は大事業ですよ。これは冒険をしてはいけない種類の仕事なのです。というのは、どのみち雑誌というものは現代のあらゆる階層の意見のあらわれとして残しておくべきだからです。……ああ！考えてもごらんさない、まだ爲ていないこと、語られていないことがあることでしょう。……現在は一切合財なんでも爲なければならぬ、そして重要なことは健全な思想に到達することです。わが國の社会では概念があまりにも紛糾してしまつた。狐疑逡巡がなにかを踏みにじつてしまつた。あなたはまずモスクワへ行きたいとおつしやるんですね。ジャーナリズムの元老どもに引ッかき廻されないように——きつとカトコフ（一八二一——一八七、五六年から『ルースキイ・ヴェストニク』を主宰していた自由主義者だつたが、時勢に迎合するオポチュニストだつたらしい——引用者）が果しない抽象の原野に野を引つぱつたようなお説教であなただを感わすことだろう……いや、いや、これは戯談です。……パリつて實に退屈至極の都会です。もしそこに實際ひどく眼をひくものがこんなに澤山なかつたら、本當に退屈死しかねません。フランス人て野郎は嘔吐をもよおさせる國

民だ。……わが國人は單に貪欲な卑劣漢で、大部分それを自覺しているが、ここでは、それが當りまえだと頭から信じこんでいる。フランス人はもの柔かで、誠實で、慇懃だが、それは猫かぶりで、万事金次第だ。理想なんてまるでない。信念ばかりでなく、ものを考えるのかなんて聞くだけ野暮だ。……あなたはおそらく、わたしがパリにきてから十日しかたつていないのに、こんな判断を下すのを、笑うかもしれないが、第一に、わたしがこの十日間に見たことがわたしの考えを確認してくれたし、第二に、氣付いたり、理解したりするには半時間で充分だし、しかも社会事情全般を明瞭に、つまりそういう事實がありそうだと、示すいくつかの事實が存在するものだ、ということとは賛成するでしょう。パリにお立寄りですか。それならお氣をつけなさい。三日もかけてパリにきて、二週間もそこで費す價値はありませんよ。……』

こうした手紙の主が三月ばかりロンドン、ジュネーヴ、フロレンスなどをまわり歩いた收穫が、やがて『夏の印象の冬の手記』（一八六三年『ヴレーミヤ』二、三月號）となつてあらわれるのだが、それはたえず自分の胸中の劇にわれを忘れていた男の冥想的な告白録みたいなもので、一年後にかかれる『地下室の手記』を暗示している。この旅行中途からストラーホフが一緒になるのだが、彼はのちにかいてある。『彼は案内書によつていろいろな名所を見物するありふれた型通りの方法を輕蔑することを、熱心にわたしに説明してきかせた。そして實際わたしたちはなにもも見物せず、ただ人混みのなかを散歩し、話し合うだけだつた。』と。

すでに述べたように、ドストエフスキイはパリに落着くと、ロンドンのゲルツエンに会いにいった。ヨーロッパの一角から『ヨーロッパ（鐘）』を發行してロシアの世論を指導していたこの自由主義的革命家を訪問することはロシアの知識的旅行家のあいだでいわば流行だつた。この禁斷の訪問はおそらくモスクワやペテルブルグへのロマンチックな匂いをする無上のヨーロッパ土産だつたのかもしれない。ドストエフスキイは秘密警察の監視つきの身の上で、

それだからこそかえつてこの名所詣でを断行したのだといえるかもしれない。むしろ彼の胸中はわからないし、その模様も一八七三年『作家の日記』の断片的な記述以外には知られていないらしい。当時のゲルツェンは解放令以後のペテルブルグの革命的空氣にはついていけなかつたので、『ニヒリスト』たちのあいだでは魅力を失墜していた。彼はオガリョフやバクーニンほどに樂天的ではいられなかつたのだ。こうした年長の革命家にドストエフスキイは如才なく振舞つたらしい。(前記のごく短かい記事から判断したかぎり)そして彼はベリンスキイと對比して、ゲルツェンを批評してかいている。

『自己反省、すなわちもつとも深い自分の感情から對吻レンズを作りだしてそれを自分のまゑに据え、それに跪拜するかと思うと、今度はすぐに冷笑したりする。こういった能力が彼にあつては最高度に發達していた。』(前記『作家の日記』二、昔の人々)

要するに、ドストエフスキイのいわんとするところは、この聰明なるロシアの社會主義者はおそろしく貴族的な懷疑家であつて、とても不條理なロシアの現實に耐えられるものではない。『彼は生れながらにしてすでに亡命者だつた』というにある。ゲルツェンの方は、この訪問の翌日オガリョフにかいている(一八六二年七月五日)『昨日ドストエフスキイがきた。彼は素朴で、あまり明哲ではないが、とても氣持のいい男です。ロシアの人民を信じていることは大變なものですよ。』

六

この外國旅行でドストエフスキイが留守しているあいだに、『ヴレーミヤ』の身邊にもただならぬ暗雲がおおいがかつてきた。

彼が旅立つていつたその翌日、六月の八日に兄ミハイルは皇帝親裁の審問委員会に出頭を命ぜられて、『若きロシア』の檄文の著者について訊問を受けた。むろん彼にはまるで身におぼえのないことで、知るよしもなかつた。おそらくこの實直な雑誌の経営者はありのままを卒直に述べたろう。が猜疑の影におびえきつてしまつた解放皇帝の委員会はそれだけですまसानかつた。『ヴレーミヤ』のむこう八ヶ月の発行停止を考えていて、皇帝も同意を與えていた。というのは例の大火に關して早速この雑誌は論文を準備したのだが、検閲不許可になり（六月一日）、かさねて『火災と放火者』なる一文を検閲當局に提出して拒否されたという事實があつたのだ。（それがどんな内容のものでつたか詳かにしないが）六月の末になつて委員会は思い直して、もう少し『ヴレーミヤ』の様子をみようということになつた。いよいよこの公正穩健を標榜して、結局三年間ペテルブルグになんら目立つた影響もあたえないでしまつた雑誌も監視付きということになつたのだ。

『ソヴレメンニク』は發行停止處分、チエルヌイシエフスキイは逮捕されて、檄文や放火の嫌疑のもとに取調べを受ける（彼は六四年五月秘密出版の執筆、叛亂豫備の罪狀をおしつけられてシベリヤ送りとなつた）、革命的啓蒙の活動も地下にもぐらざるをえなくなつてきた。この秋には『國土と自由』社という秘密結社が中央ロシア人民委員会というようなものをペテルブルグに結成して、國外のゲルツェン、オガリヨフらと連絡をとるようになる。そうしたロシアへドストエフスキイは歸つてきて、『大事業』を進めてゆくのだが、さし當つて來年度の豫約募集の廣告文を作らなければならなかつた。この廣告も創刊のときと變らぬ至極抽象的なものだが、その頃オレンブルグから歸つてきて再び参加したグリゴリエフの發明になる理論派と空論派という用語で、『ニヒリスト』といわば自由主義の正統派（例えば『ルースキイ・ヴェストニク（ロシア報知）』）に對する批判に終始している。

『今年からわが國の進歩的な生活、わが國の進歩主義（もしこう表現ができるとすれば）は當然べつの形式、いや

それどころか場合によつては、べつの根元すら採らなければならぬ、そういうふうにわれわれは感じるのである。生活における國民的要素の必要は明白に感知しうるものとなりつつある。……これは余りにも明瞭なことなので、事實において、進歩主義も保守主義も、この點で一致している。』

こんなところが、この脅かされたジャーナリストたちの本音だつたにちがいない。いずれにしても雑誌の經營はドストエフスキイ兄弟にとつて死活問題だつたらうし、この程度ならばまず満足のゆく状態だつたのだらう。『ソヴェメンニク』が一八六三年四月の附録『スヴィストーク』に『自負心強きフェジヤ』（フェジヤはドストエフスキイの名前フョードルのこと）と題して、

かつて彼は『外套』まとい呑氣に

ゴーゴリを演じたが、

金銀モール野暮くさく

ヴレーミヤを飾り………云々

という譚詩をのせて、『ヴレーミヤ』の主筆を揶揄している。のちにドストエフスキイが『白痴』の『プロレタリアと成金』という新聞記事のなかにかいた詩はこれの替え唄だといわれる。

こんなエビグラムが彼らを苦笑させているあいだに、この同じ四月の『ヴレーミヤ』にロシア人と署名した『宿命的な問題』というポーランド問題を扱つた論文がのつたが、これが雑誌の命取りになつてしまつた。

すでにこの年の一月二十二日の夜、ロシアの駐屯軍に對する一齊攻撃をもつて始つたポーランドの叛亂はロシアの朝野に深刻な動搖を與えた。『國土と自由』社の革命家たちはこれに呼應して、ロシア本土で蜂起するという默契があるという噂もあり、ロンドンのゲルツエンやバクーニンはポーランド援助を聲明したりしたが、この非常事態は大

多數のロシヤの民衆の愛國的感情を喚起し、政府の立場を強化するに役立つた。ゲルツェンの『コロコル』の流布は三千から五百に激減し、革命家たちの權威は急速に失墜した。ロシヤの『解放』時代はここに完全に幕を閉じた。ポーランド問題はむかしからロシヤの癌であり、これについてはさまざまな見解が行われていて、ポーランドをわが國から解放した方がロシヤのためだ、という意見も大きな世論だつたのだが、叛亂はロシヤ人の度膽をぬいた。ペテルブルグのジャーナリズムは沈黙するほかはなかつた。神經をとがらしていた政府のもとで沈黙はかえつて危険だつた。そこへ『宿命的な問題』が登場した。

論文の主旨は、ポーランドの貴族はヨーロッパの教養の久しきに渉る攝取によつて成長しているし、ロシヤ人より秀れていると自らを恃んでいる。これはただ物質的な力ばかりでなく、精神的な武器をもつて彼らと闘わなければならぬということだ。問題の徹底的な解決は精神的優越をポーランドのうえに克ちうるときにはじめてやつてくるので、この點に關しては、なお独自の文化を維持して發展しつつあるわがロシヤは必ずや、自からの文化を喪失したポーランドを克服するであろうし、われわれにはポーランド人に見られる如き志向と感情の絶望的な混亂に陥らないようにしなければならぬ、といつたふうのいわば『ポーチヴェンニキ』正統の思想を披瀝したものだつた。『ドストエフスキイ兄弟とも初めはわたしの論文に大變満足しており、それを賞讃した。』とこの論文の筆者ストラーホフ（二八二八——九六）はかいて、『知性の混亂状態、あらゆる問題のこの頑迷狭少な置き方、判斷上のカテゴリーのひどい貧困』に見舞われていたロシヤの社会に憤懣をもらしているが、グリゴリエフによつてスラヴ主義の洗禮をうけて、完全に彼に傾倒していたこの高等師範出の論客の文章は抽象的でそつげなく、世情の機微に投ずるにはたしかに拙劣にできていた。

『ヴレーミヤ』はどんな機会ものがすまいとねらいをつけていた敵にことかかなかつた。早速『モスコフスキエ・

ヴェドモスチ（モスクワ報知）紙（六三年にはカトコフとペ・レオンチエフがやつていた、）が、回答を要求する告發文を掲載した。ドストエフスキイはこの思いもよらぬ告發に激昂して、早速回答文をかいて『ペテルブルグ報知』に掲載かたを依頼し、それは採用されたのだが、検閲を通らなかつた。が雑誌が危ないという噂が擴がり、それがしつこいものになると、ストラーホフは青くなつて、方々かけずりまわつて、ジャーナリズムの元老どもやその筋にどんな運動でもやつた。がどれもこれも効を奏さなかつた。政府はついに無期限の發行停止を決定した。『ヴレーミヤ』はかくして二年四ヶ月でペテルブルグから姿を消してしまつた。こんな毒にも薬にもならぬ雑誌はつぶれたつて構わないさ、というものもいたし、いや、こういう穩健な雑誌がつぶされるようでは、と嘆くものもいた。だがなによりも、ドストエフスキイ兄弟にとつてこの打撃は生活上の死活問題だつた。ふた月ほどたつた六月十七日のツルゲーネフあての手紙のなかで、ドストエフスキイは（眞から白状しますが）と括弧して、『兄は雑誌の發行停止によつて全く見るかげもなく零落し、彼の家族はほとんど乞食をして歩かなければならないほどの状態なのです。』とかいている。もつともこれは編集者が寄稿家への金の言いわけとしてかかれたものだ。

あとで『モスコーフスキエ・ヴェドモスチ』はこれは少し薬がききすぎたと感じ、自から動いて『ルースキイ・ヴェストニク』誌に第三者の解説というかたちで、『宿命的な問題』を論じさせ、ストラーホフ、つまり『ヴレーミヤ』の立場を輕減してやつた。それでドストエフスキイたちは雑誌の再建に一抹の希望を抱くことができるようになった。

附記。この論文は主として次の書物を参考にしておかれた。

エヌ・ストラーホフ『エフ・エム・ドストエフスキイの回想』（傳記・書簡・手帳のノート、ペテルブルグ、一八

八三、所收)

レロニード・グロスマン『エフ・エム・ドストエフスキイの生涯と勞作』アカデミア、一九三五。

ア・イ・デリヴィグ『ロシア生活の半世紀(回想記)』第二卷、アカデミア、一九三〇。

なお、『作家の日記』『——ポフ氏と藝術の問題』『ヴレーミャー一八六三年豫約募集廣告文』からの引用は米川正夫氏の譯から、假名遣いなどをあらためて借用させていただいたことをお断りしておきます。